

6. 琉大移動美術展

琉球大学のそこかしこに美術作品があります。附属図書館や会議室の絵画や彫刻、首里の杜にある石彫、大学本部棟ロビーの陶壁画、共通教育棟の外壁にも色鮮やかなレリーフがあります。

これら作品の作者の多くは琉球大学で教鞭をとってきた歴代の教員たちです。琉球大学の教員たちは戦後沖縄の美術を牽引してきました。そして、その水脈はもちろん現在の琉大の教育に繋がっています。

学長室には戦後沖縄美術史を語る上で外すことのできない安次嶺金正の名作「バナナ」が飾られています。今回の未来共創フェアを開催するにあたり、大城肇学長は、このような沖縄の財産を独占してはいけない、広く皆さんと共有したいと、琉大移動美術展を発案しました。

たった1日限りの公開ですが、3年前に修復して本来の色彩を取り戻した安谷屋正義「塔の群れ」をはじめ、厳選された絵画11点を展示します。本学教授の解説もありますので、ぜひご参加ください。



大城皓也 (1911 - 1980) 「榕樹の森の囁」 1971年

大城は、琉球大学への勤務は1950年から1年余りと短期間でしたが、後にアマチュア美術家グループの「びよびよ会」の顧問となり多くの後進を育てました。戦前から戦後まで様々な作風の変化を示していますが、一貫して洒落で気品のあふれる作風です。70年代になってイザイホーなどを取材し独自の民話的世界を描きます。



山元恵一 (1910 - 1977) 「季節風」 1971年

モダニストであった山元は生涯、シュールレアリスム風な具象から抽象まで、次々に作風を変えていきましたが、晩年の1970年代前半に集中して、牛頭骨を描いた作品を数多く制作しました。その色彩は、代表作である「貴方を愛する時と憎む時」(1951)と同様の、砂漠を想起させるピンクを基調としています。



安次嶺金正 (1916 - 1993) 「琉球の民家」 1954年

安次嶺は、ニシムイ美術村の安谷屋正義や玉那覇正吉らと共に活動し、戦後美術を牽引した重要な画家です。1947年に戦地から帰還し、48年5月には第1回個展を開き、50年にはニシムイの画家と五人展を発足、この五人展ではマティスやピカソの複製画も展示し、その目指す絵画性を示しています。この「琉球の民家」は、このような流れの中で伝統的なモチーフを探求した時期の作品ですが、前年の「のぼり窯」(1953)に比べ、明らかに絵画の平面性を意識していることが分かります。



安次嶺金正 (1916 - 1993) 「バナナ」 1954年

モダニズム絵画の平面性を追求した安次嶺ですが、その探求の成果は、「薫風」(1955)に顕著です。「薫風」では視線を移すたび、画面全面を埋め尽くしたそれぞれのバナナの葉の空間的な位置が前後に変化します。このようなオールオーバーの「図と地」の変換はまさに抽象表現主義の特質と同様であり、この時期に安次嶺が既にこのような絵画性を獲得していたことは驚きです。

琉球大学所蔵のこの「バナナ」は「薫風」の前年に描かれました。「薫風」ほどは洗練されていませんが、その絵画性を探求し試行錯誤した痕跡が、安次嶺には珍しい厚塗りの絵具層に現れ、それがこの作品の魅力ともなっている歴史的な作品です。



安次嶺金正 (1916 - 1993) 「道」 1967年

安次嶺は道を題材にした作品を生涯にわたり数多く描いていますが、この作品は前年の「村への道」に続く最初期の作品です。道そのものの形態は透視図法的に扱いつつ、周囲のサトウキビ畑は簡略化された縦方向のストロークのみで表し、やはり絵画の平面性の中での豊かな空間を追求しています。この年、同僚でもありライバルでもあった安谷屋正義が急逝しました。この作品は一世を風靡した安谷屋の「塔」や遺作の「道」への安次嶺ならではの返答であり、亡き安谷屋へのレクイエムのように思われてなりません。

80年代に入り安次嶺は自らの60～70年代の作品に加筆した作品を数多く制作します。そのため、60年代の作品は現存するものが少なく、本作品はそのような意味でも貴重な作品です。



安谷屋正義 (1921 - 1967) 「塔の群れ」 1963年

1967年琉大在職中の安谷屋の急逝は、沖縄の絵画の歩み全体を一旦止めてしまった程の衝撃だったことでしょう。安谷屋といえば「塔」(1958)と「望郷」(1965)が有名ですが、その間に1963年の第1回フォルム画廊個展に出品された横長同一サイズの「滑走路」(沖縄県立博物館・美術館蔵)と「塔の群れ」の2点の秀作があります。この「塔の群れ」は2016年に修復され、変色したニス除去されて、本来の色彩を取り戻しました。2011年の沖縄県立博物館・美術館での回顧展にも出品されなかった本作品は、今回の琉大移動美術展の目玉作品です。理知的でありながら、この震えるようなリズムを湛えた名作をどうぞ心ゆくまでご覧ください。



宮城健盛 (1915 - 2001) 「祭りの終点」 1974年

幼い頃から図画と書に才能を見せていた宮城は、東京美術学校の図画師範科に進学し卒業しています。安次嶺金正、玉那覇正吉、安谷屋正義と共に活動しながらも、台湾の画家と交流するなど、独自のスタンスで自らのスタイルを作り上げました。1960年代後半から薄塗りの暈しを用いた表現を追求し、この「祭りの終点」は、色面の構成力と宮城ならではの柔らかな墨彩的な筆使いが独特な浮遊感を生み出した、一つの到達点を示す作品です。



玉那覇正吉 (1918 - 1984) 「ホワイトビーチ」 1973年

原田マハに「太陽の棘」を書かされた肖像画「スタンレー・スタインバーグ」(1949)と「自画像」(1949)、その作者が玉那覇です。玉那覇は彫刻家、画家として戦後沖縄美術を牽引しました。絵画では安谷屋正義と同じ春陽会で発表を続け、「鳥たち」(1966)で会員に推挙されました。この「ホワイトビーチ」も同じ系列の、青を基調とし厚塗りの絵具層で色面的造形を追求した作品です。これらの作品は絵画としてとても美しい。しかし、彫刻と乖離した表現のように感じてしまうのは私だけでしょうか。ニシムイでの作品のスタイルのまま絵画と彫刻を極めて行ったら、どんなに深い精神性を湛えた作品になっていたのか…。こんな夢をさせてくれる作品が琉球大学附属図書館1階ロビー壁面にあります。浮彫彫刻「灯」(1981)を、是非、琉球大学を訪れご覧になって下さい。



稲嶺成祚 (1932 -) 「夕暮どき」 1980年

1950年代末に一旦抽象を志向した稲嶺ですが、抽象絵画の還元主義に疑問を抱き、最も簡潔な具象性として子どもの落書きに注目しました。ニューペインティングの先取りとも言える稚拙な落書き風の作品は、その後筆触や輪郭線が整理され、現在に続く色面的な稲嶺スタイルが生まれました。この「夕暮どき」では、現実の風景の支配からより絵画を自由にするため、画面を区切りどの区画にも空と地面がある、上から下まで均一な密度の絵画を目指しています。上から二つ目の区画では、なんと木が上から生えていますね。この後、モチーフは家族像が中心となり、静物画や風景画、時には戦争までも題材にしながら、現在も意欲的に新作の個展を毎年開催しています。



翁長自修 (1934 -) 「景象・光る風」 1983年

数々の装丁やロゴデザインを手がけ、洒落なデザインセンスを発揮した翁長は、その優れた感覚を活かし絵画の制作も継続してきました。創斗展には稲嶺成祚とともに1965年から加わり、新象展を発表の場としてきました。「景象・光る風」は、翁長の得意とするブルーの茫漠とした空間に、漂う気流を感じさせる心地よい作品です。琉球大学退職後すぐに開催した個展で、無彩色の巨大なインクジェットプリント作品の連作を発表し、その深化した造形性を示しました。その後体調を崩され、暫く作品の発表が無いのが本当に残念です。



安次富長昭 (1930 -) 「狂言」 1983年

1958年に若くして、安谷屋正義、安次嶺金正、玉那覇正吉と創斗会を結成した安次富は、この年、母校琉球大学のデザイン担当教員となりました。琉球切手のデザインや公共施設の緞帳、海邦国体の聖火台など数々のデザインを手がける一方、継続して絵画作品を制作、主に国画会を発表の場としてきました。その作品は徐々に抽象を志向し、1969年「民話へのいざない」で、鮮やかな色面で構成される現在のスタイルになりました。この「狂言」でも、鮮やかな色面が、おらかなユーモアを感じさせ、力強い生命力を醸成させます。2017年沖縄県立博物館・美術館が開催した回顧展では、2000年以降の作品群でこのおらかさをより優れた造形性に昇華し、益々の健在ぶりを示しました。